

IMAGINE  
THE  
FUTURE.

## 附属大塚 学校だより

本校は、世界最高水準の知的障害教育を目指します。

## 「自分が知っていること」について考えること ～教室の窓から⑥～

毎年、運動会と大塚祭は生徒会がスローガンを考えます。今年の大塚祭では「平成最後の大塚祭 大塚、半端ないって！」でした。どこかで来たことのあるこのフレーズ、生徒達は、自分たちで考え、相談して決めました。

生徒同士で「相談する」ことは簡単なことではありません。物事を決めるためには、まずゴールを共有することが必要です。そして、誰かがイニシアチブをとり、目標に向けて自分が持っている知識（知っていること）や技能（自分にできること）を引き出しながら互いの意見を交換します。自分は「何を知っているか」、「何ができるのか」について「知っている」ということを「メタ認知」というそうです。メタとは「上位」とか「超えた」という意味です。このメタ認知があることで、様々な計画を立てることができるようになると言われています。「私は、漢字ドリルを1日1ページずつなら頑張れる」と言えるAさんはメタ認知を働かせたと言えます。一方で、あなたは何ページずつやりますか？という問いに「1日10ページ」というBさんは、「自分に何ができるのか」ということについての理解につまずきがあるかもしれません。

このメタ認知は、知的障害のあるお子さんにとっても必要な力です。毎日の学校生活、家のお手伝い、様々な生活場面で「何をどのように」やるかについて「考える」きっかけを与えることで「メタ認知」は育てることができます。「ホットケーキを作ろうか」と言った時、「どうやって作る？」「材料は何が必要かな？」そんな問いで、自分が持っている「知恵」を引き出して答えるといった「考える」経験を作てあげることです。こうした経験の積み重ねは将来の職業選択に役立っていきます。自分ができる仕事は何か、目標に向かってやるべき課題は何か、といった自分自身についての理解を深めながら、自分にあった仕事や事業所を考えられるようになっていきます。「今」できることから、「将来」やりたいことについて「考えること」が一人一人のキャリア発達を支えていきます。



生徒会のスローガン発表の様子

## 認められる経験が支える主体性 ～教室の窓から⑦～

大塚祭のステージ発表は、どの学部も見応えがありました。スポットライトを浴びる中、大勢の観客を前に伸び伸びと表現する姿が印象的だった幼児児童。一方、緊張感のある中で精一杯自分の力を発揮しようとする姿が見られた中高等部の生徒たち。子供達にとって、人前で発表する経験は「褒められ、認められる経験」の場でもあります。主体的にある「コト」に向かうためには、自分自身の興味関心に基づく動機だけではなく、認められたいという動機に支えられます。「頑張ってるね」「期待しているよ」そんな励ましに応えようとする動機は、様々な「コト」に前向きにチャレンジしようする自分を支えます。そんな「褒めて認める」機会は、毎日の生活にもたくさんあります。結果がうまくいかない時でも、頑張った姿にしっかり大人が応えたいですね。



## 先人の礎と今 ～温故知新③「躰とは自分がし続けること」～

戦後の滋賀県には、障害児者の福祉や教育の礎を築いた三人の先人がいました。

糸賀一雄氏（1919-1968）は、行政の立場で様々な国の制度づくりや福祉施設創設を手がけ、多大な業績を残しました。糸賀先生は、重度の障害児であっても、人間としての生命の展開を支えることが重要であるとの理念のもとに、「この子らに世の光を」ではなく、「この子らを世の光に」と唱え、人間の新しい価値感の創造を目指した人権尊重の福祉に取り組みました。

糸賀先生は、地域で共に生活する社会を目指した池田太郎氏（1908-1987）、障害児者と共に生活し、働く生活を通じた教育を実践した田村一二（いちじ）氏（1909-1995）の三人で様々な取り組みを始めました。

戦後の黎明期にあった三人の考え、そして実践は、脈々と現代に受け継がれ、障害者の療育・教育・労働・福祉など様々な分野における理念や哲学の礎となりました。

ある時、田村先生は、息子さんの躰について糸賀先生に質問しました。糸賀先生は「躰は自覚者がそれをし続けることだ」と言いました。履物を目の前脱ぎ捨てる息子さんを横目に、始めはイライラしていた田村先生。いつしか息子さんのことを忘れ、きれいに並べようとする自分に気づきました。この時、口先だけでは誰もついてこない。自分が楽しんでこそ人もついてくるという人生観を学んだようです。息子さんは気がつくや履物をきれいに並べるようになったようです。

大人は、とにかく子どもに「～しなさい」「～してはだめ」と言うことが多いのではないのでしょうか。過去に教育の現場でも「～させる」という使役形の表現が使われていました。しかし、子どもの主体性を支えるためには、まず周囲の大人がモデルとなることが大切だということを先人が教えてくれます。そうした大人になる努力を私たち自身もし続けたいものです。

田村先生が施設長を務めた「一麦寮（いちばくりょう）」では、重度の知的障害の方に、陶芸を通して「生きること」を支えています。寮の脇には小さな石ころのような焼き物が山のように積んであります。売り物とも作品とも思えない小さな塊も窯で焼き、寮生さんの「存在の証」として捨てずに残していると職員の方が言っていました。滋賀にはこうした施設がたくさんあります。質のいい物づくりを目指し、泥しうやロクロによる成型で製品を作る一方で、彼らが「生きること」について真剣に向き合い、一人一人が自己実現できる姿を求める根底には、三人の偉大な先人の精神が生きています。学校卒業後の福祉を考えることは、私たち教師にとっても大切です。

※写真は、公益財団法人「糸賀一雄記念財団」、社会福祉法人「大木会」に掲載の許可をいただきました。

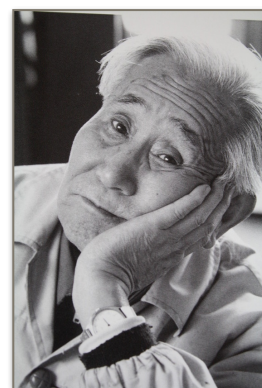


近江学園を創設した三氏

左から田村先生、糸賀先生、池田先生



糸賀先生と子どもたち～近江学園前～



晩年の田村先生

### おすすめの本を紹介します（どの本も心が洗われます）

糸賀一雄「この子らをよの光に」 柏樹社

池田太郎「めぐりあい・ひびきあい・はえあいの教育」 北大路選書

田村一二「賢者モ来タリテ遊ブベシ」 NHKブックス「茗荷村見聞記」 北大路書房

施設に興味のある方は、近江学園、びわこ学園、信楽学園、一麦寮、もみじ寮、あざみ寮などを検索してみてください。

## 『共生社会を目指す「スポーツ交流とシンポジウムの集い」』



筑波大学附属学校教育局主催でスポーツを通じた交流会が下記の日程で行われます。障害者アスリートの講演、黒姫高原共同生活やスポーツ等の体験に基づくシンポジウムを行うことにより、共生社会に向けた意識を養い育て、併せて共生社会の意義を発信するものです。当日は、中学部2年生が黒姫高原共同生活の発表を行います。申し込みは終。



**日時：**平成30年12月9日（日）10:00～16:00

**講演：**「いろいろな人と生きるということ」

**シンポジウム（第1部）**（秋元妙美氏）

11:40～12:00映像による黒姫高原共同生活の紹介

**シンポジウム（第2部）**

13:00～14:00「黒姫高原共同生活が与えてくれたもの」～最初は「はじめまして」から、いつの間にか「また会ったね」の関係に～附属学校児童生徒発表

14:10～15:50（スポーツ交流）

「障害者スポーツとアダプテッドスポーツ体験」

**会場：**筑波大学附属中学校・附属高等学校

## ～「文京区ふれあいの集い」のお知らせ～

文京区では、12月3日から9日の障害者週間にあわせて、障害についての理解と関心を深めるため、小・中学校や障害者施設・個人・団体などの作品展示や催しを行なっています。

**作品展：**8日（土）～10日（月）13:00～15:00 **会場：**文京区シビックセンター1階ギャラリーシビック、アートサロン（1階）本校の作品を展示します。

**工房わかぎり**（社会福祉法人わかぎり）による革小物の実演販売及び作製体験

12月9日（日）10:00～15:00

**会場：**アカデミー文京学習室（地下1階）

## 12月の予定

3日（月）～9日（日）障害者週間

9日（金）～10日（月）

文京区「ふれあいの集い」作品展

シビックセンター1階 9:30～17:00

3日（月）合同朝会

4日（火）～6日（木）入試（学校休業）

7日（金）体育校外学習（高：筑波大学）

**学校評価アンケート提出締切**

9日（日）『共生社会を目指す「スポーツ交流とシンポジウムの集い」』（附属中高）

10日（月）スマイル（高）

放課後支援（桐親会）

11日（火）発育測定（幼小）

12日（水）スマイル（中）

スキー合宿事前学習①（中高）

13日（木）お楽しみ会（小）

給食終了

14日（金）授業研究会（中高）給食なし  
学校休業（幼小）

15日（月）授業研究会（幼小）給食なし  
学校休業（中高）

17日（火）短縮授業

幼小11:15下校 中高11:30下校

19日（水）学部懇談会（小）

20日（木）終業式

1月

8日（火）始業式

9日（水）短縮授業

幼小11:15下校 中高11:30下校

10日（木）給食開始

スマイル（中）

スキー合宿事前学習②

11日（金）保護者会 13:30下校

卒業記念写真撮影

**※卒業生と保護者が一緒に撮影**

